

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：31501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02303

研究課題名(和文) 小規模映画における保存と修復及びアーカイブに関する研究

研究課題名(英文) Research on Conservation, Restoration and Archive Storage/Retrieval System for Alternative Cinema

研究代表者

加藤 到 (Kato, Itaru)

東北芸術工科大学・デザイン工学部・教授

研究者番号：90254854

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,500,000円

研究成果の概要(和文)：山形国際ドキュメンタリー映画祭を軸としてユネスコに映像文化創造都市として認定された山形市が、今後創造都市の名に恥じないような映像文化活動を行っていくうえで、映像アーカイブというキーワードを掲げることを意味と有効性を確認することができた。今後の山形市の映像文化は、映画祭と映像アーカイブの二つの機関が車の両輪となって進めていくことを方向付けることができた。

映画祭とは祭りであり、神社から御神輿を持ち出して火を焚いてワイワイやって、またそれを元に戻して保管する。その戻す先が宝物殿であり、映像アーカイブである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は人類の遺産としての映像記録を、どのようなシステムで後世に残していくことが可能かという学術的課題と同時に、山形市におけるドキュメンタリー映像アーカイブ設立に向けた具体的なプラン検討を目的としていた。

現在、現実的なアーカイブ設立構想が策定される段階であり、この時期にアーカイブについての概念や実際の運用方法などについて多くの事例をもとに議論できたことは大変有意義であった。

今回の研究成果が、今後のアーカイブ構想に有効利用されることを大きく期待している。

研究成果の概要(英文)：This project has revealed the importance and benefits of film archiving practice among cultural activities on moving images that Yamagata City will continuously promote as a UNESCO Creative City of Film. We conclude that both the Yamagata International Documentary Film Festival and a film archive project should play a leading role in tandem in the city's film-based cultural activities.

In a Shinto festival for example, people carry around a portable shrine mikoshi, celebrate over a bonfire and then bring it back to the repository for further preservation. The film archive is to the film festival what the repository is to the portable shrine.

研究分野：実験映画・ドキュメンタリー

キーワード：アーカイブ フィルム デジタル ドキュメンタリー映画祭 保存修復 テレシネ デジタイズ 実験映画

## 1. 研究開始当初の背景

1989年に始まって、今年で、16回目、30周年の開催を終えた山形国際ドキュメンタリー映画祭は、山形市の映像文化活動の核として、2017年ユネスコ創造都市ネットワーク加盟認定への最大の要因であったと言える。国内外から映像文化創造都市として認知された山形市が次に取り組むべき課題として映像アーカイブセンターの設立が求められている。

東北芸術工科大学を中心に展開した前回の科研費プロジェクトでは、デジタルシネマ時代における上映形式や保存、修復、アーカイブについて、主に小規模映画という視点から研究を続けてきた。これらの研究活動を経て、非商業的な小規模映画を保存、利活用していくことの社会的意義が確認され、現実的にアーカイブセンター設立の重要性が浮上してくることとなり、実現に向けた具体的なプラン作成へ向けて研究がすすめられた。

## 2. 研究の目的

2017年山形市はユネスコ創造都市ネットワークに映画部門として国内で唯一、初めて加盟認定された。この認定を受けた背景には1989年より隔年開催されてきた山形国際ドキュメンタリー映画祭の存在が大きい。

当初山形市の主催で開始されたこの映画祭は、2007年よりNPOへと独立、さらに2014年からは認定NPO法人として発展し、2018年には米国アカデミー賞の公認映画祭となるなど目覚ましい発展を遂げてきた。

本年10月に開催された、山形国際ドキュメンタリー映画祭2019のコンペティション部門には、130の国と地域から過去最高の2,371本の作品がエントリーされた。

一方、これまでの山形映画祭にエントリーされた多くの作品は、山形市北部に1994年設置された山形ドキュメンタリーフィルムライブラリーに保存されているが、その保存状況や、利活用の実態は決して十分なものとは言えない。

その様な現状の中で、山形市では現在市内中心部の「まなび館」(旧第一小学校)を再リノベーションし、創造都市の拠点となる施設の建設に着手しようとしている。

本研究では、このリノベーション計画とも連携を持ちながら、国際ドキュメンタリー映画祭を主軸とする山形市の映像文化の中核となるべき映像アーカイブセンターの設立構想を導き出す事を目指した。

## 3. 研究の方法

### (1) 山形国際ドキュメンタリー映画祭とアーカイブとの関係性

現在、世界中の各都市で開かれている国際映画祭を俯瞰したとき、その成立意義は、映画産業における市場見本市であることが一般的だ。世界各国から映画の配給に携わるバイヤーたちが訪れ、自国に紹介することで商業的価値を生むであろう作品の配給権を獲得するためのマーケットとして機能しているわけだ。

こういった側面は山形国際ドキュメンタリー映画祭にもないわけではなく、一部の作品については、山形映画祭が商業ベースでの成功のきっかけとなっているケースも多々見受けられることができる。

しかし、個人または小規模な制作体制で制作される、セルフドキュメンタリーや、実験的な映像作品、学生作品など、あるいはその上映時間が数時間以上に及ぶ超長編作品など、映画産業の

市場的価値とは直接結びつかないが、人類の遺産として、映画の歴史の1頁として絶対に保存しておかなければならない価値を有している作品も数多い。

そこで、映画祭の存在意義を、マーケット型から、アーカイブ型へシフトしてみることが有効となってくる。商業的価値につながるかよりも、人類の歴史に残るかという価値を映画祭が保証していくという映画祭の新たなスタイルが成立すると考えられる。

## (2) 既存の山形国際ドキュメンタリーフィルムライブラリーの問題点整理

山形市がドキュメンタリー映画祭を初めて3回目の1993年ごろから、映画祭終了後に残った、フィルム作品のプリントや、予備先行のために送られてきた膨大な数のVHSテープ、DVD等の保管場所が必要となり、当時、山形市内に建設計画が検討されていたコンベンションセンターの1画に、山形ドキュメンタリーフィルムライブラリーが建設されることとなった。2018年度現在で約15,000本の作品が保管されている。

温度、湿度を管理できるフィルム保管庫のほか、収容人数40人ほどの試写室、ビデオブース等を備え、作品の貸し出しや、ビデオブースでの閲覧、試写室を使つての上映会などを企画しているが、その管理の実態は決して充分とは言えない。

山形市からの指定管理者であるコンベンションビューローから、さらに委託をうけた認定NPO法人山形国際ドキュメンタリー映画祭が、囑託職員1名を配置して最低限の業務をこなしているのが実状で、施設の老朽化等に対策するための予算の見込みは全くない状況だ。

また、立地条件も悪く、山形市中心部から車で15分ほどの距離とはいえ、自家用車を持たない、学生や、旅行者にとっては、バスや、電車等の公共交通機関を使うことは、あきらめざるを得ない環境だ。

この、山形映画祭が継続されてきたゆえの財産を今後も保存し続け、利活用していくためには、新たなアーカイブセンターの仕組みとの連携が最も現実的だと考えられる。

## (3) ドキュメンタリー映像に特化させたアーカイブ活動とは？

国内に現存する公共フィルムアーカイブは、国立映画アーカイブを中心にして、川崎、京都、広島、福岡に設置され、それぞれの特徴を持ってアーカイブ活動を展開しているが、多くは日本の劇映画を中心とした収集活動を中心としており、非商業的な、小規模映画やドキュメンタリー映画に重点を置いているアーカイブは存在しない。

それぞれのアーカイブがその特徴を生かしながら互いにネットワークを形成することは今後ますます期待されることで、そういった意味においても山形でのアーカイブ活動が、ドキュメンタリーや小規模映画に特化されることが期待されている。

## (4) 東北地方、裏日本唯一のアーカイブセンターの意義

前項で説明したように、国内の既成の公立フィルムアーカイブは、東京の京橋に本部のある国立映画アーカイブ以北には一つもない。

東北、北海道という、民俗学的にも非常に重要な地域の映像資料の保存修復活動は、国家的な重要プロジェクトの一つとすることができる。また、現在移転準備中の東京国立近代美術館工芸館の石川県移転計画の中にも触れられているように、日本海側に国立美術館が一つもなかったことを踏まえて、工芸部門でのユネスコ認定を受けている創造都市金沢市への移転することは、同じ日本海側の山形市に公立アーカイブを設置するうえでの大きな参考事例となることだろう。

## (5) デジタルアーカイブ技術への対応（デジタルネットワーク化）

今回の研究に先んじた二つの関連研究では主にデジタル映像の上映形式、保存修復活動に取り組んできた。当然ながら、デジタルシネマが全盛となっている現代において、アーカイビングもまた例外なくデジタルの時代を迎えている。

完璧な複製あるいはオリジナルそのものとも言えるデジタルデータをどのように保存し、利活用していくかも今回の研究における重要なテーマである。

#### (6) 国内外の既存アーカイブとの連携活動の可能性（北インド、沖縄、他）

国内外のアーカイブとの連携も重要なテーマとなる。

今年開催された山形国際ドキュメンタリー映画祭では、インド北東部に発足した「インド北東部視聴覚アーカイブ」と映画祭との提携協定が結ばれた。長年の政情不安の中でこの地域の視聴覚文化を未来に残すためにも、山形映画祭との提携を結んでデジタルデータを共有し、不測の事態から保護することを目標に掲げている。

国内では、沖縄アーカイブ研究所の活動が注目される。琉球王国から米軍支配へとつながる特別な時代背景の中でアーカイブの哲学が醸成されてきた地域性を生かし、個人が保存収集してきたプライベートな映像の価値を再評価しようとしている。

#### (7) 東北地域の他大学と東北芸術工科大学との連携

山形市における映像アーカイブ設立を考えるうえで大学のかかわり方は特に重要である。このプロジェクトの中心となる東北芸術工科大学には、文化財保存修復学科が存在する。現時点ではフィルムや視聴覚資料に対する専門的なコースは存在しないが、山形の映像文化の未来を考えた時には、日本初の映像資料の保存修復を専門にしたカリキュラムを持つ大学としてアピールすることも検討する価値があるだろう。

山形大学では、2014年人文学部に映像文化研究所を設立し、アンドレ・バザン研究等、学術的な視点から映像文化の研究に取り組んでいる。

山形市の大学だけではなく、仙台地域をはじめとする、東北地域の大学とも広く連携し、震災復興や、地域おこし、インバウンド対応や、観光資源と映像文化との連携も視野に入れた研究が必須である。

## 4. 研究成果

この研究で行われてきた数々のシンポジウムや講演、ワークショップ等によって、今後の山形市が「映像アーカイブ」というキーワードを掲げることの意義がしっかりと確認されることとなった。今後「映像アーカイブ」は「山形国際ドキュメンタリー映画祭」と伴に山形市の映像文化をけん引する車の両輪として機能していくことになっていくことだろう。

コロナ禍の状況の中で今後の映画祭の在り方が再検討されてくることになる。特にこれまでの山形映画祭に於いては、作品上映後の密な環境における話し合いの場を重要視している点が高く評価されてきたが、その状況が許されなくなった今、映像作品をアーカイブすることを大きな目的として掲げる映画祭に大きな未来的意義が含まれていることを忘れてはならない。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 田口かおり	4. 巻 33
2. 論文標題 ジャン＝フランソワ・ミレー《角笛を吹く牛飼い》調査修復報告書	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山梨県立美術館紀要	6. 最初と最後の頁 7-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田口かおり	4. 巻 1
2. 論文標題 2030年：保存修復の倫理（エシクス）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『2030年の美術館』TOYOTA ART MANAGEMENT	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田口かおり	4. 巻 1-1
2. 論文標題 アーカイヴと表象文化論の現在	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『REPRE21』表象文化論学会	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 阿部宏慈	4. 巻 1
2. 論文標題 「見ることの愉悦と責務 『孤独な存在』『また一年』・・・」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Sputnik YIDFF Reader 2017	6. 最初と最後の頁 9 - 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阿部宏慈	4. 巻 1
2. 論文標題 山形映画祭「ここが見どころ(1) インターナショナル・コンペ部門」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 山形新聞他	6. 最初と最後の頁 15-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田口かおり	4. 巻 5
2. 論文標題 「近現代美術の「臭気」をめぐる一考察」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『ディアファネース』	6. 最初と最後の頁 55 - 63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口かおり	4. 巻 1
2. 論文標題 「イタリアにおける保存修復理論の発展史」「論点提示と解題」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『文化遺産がつなぐ世界と日本-保存・修復・活用と国際交流』	6. 最初と最後の頁 11 - 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石崎武志	4. 巻 1
2. 論文標題 地方における映像アーカイブの可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小規模映画における保存と修復及びアーカイブに関する研究報告書	6. 最初と最後の頁 4 ~ 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 馬場一幸	4. 巻 1
2. 論文標題 3Dプリンタによるフィルム映像装置の部品試作	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小規模映画における保存と修復及びアーカイブに関する研究報告書	6. 最初と最後の頁 28～31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部宏慈	4. 巻 1
2. 論文標題 再び失われた時を求めて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小規模映画における保存と修復及びアーカイブに関する研究報告書	6. 最初と最後の頁 32～53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北小路隆志	4. 巻 1
2. 論文標題 アーカイブの創造性/創造の場としてのアーカイブ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小規模映画における保存と修復及びアーカイブに関する研究報告書	6. 最初と最後の頁 12～19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤到	4. 巻 1
2. 論文標題 シンポジウム「新たな創造都市拠点設立に向けて」報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小規模映画における保存と修復及びアーカイブに関する研究報告書	6. 最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石崎武志	4. 巻 1
2. 論文標題 山形ドキュメンタリーフィルムライブラリーの収蔵庫内の温湿度測定結果	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小規模映画における保存と修復及びアーカイブに関する研究報告書	6. 最初と最後の頁 56-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 阿部宏慈
2. 発表標題 Il Festival internazionale dei film documentari di Yamagata
3. 学会等名 Caleidoscopio Giappone: Arte, cinema e poesia da Yamagata a Bologna (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口かおり
2. 発表標題 美術作品の保存修復における光学調査の射程：ヴィンセント・ヴァン・ゴッホの油画をめぐる新発見を中心に
3. 学会等名 レーザー学会第39回年次大会公開特別講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口かおり
2. 発表標題 美術作品の保存修復と光学調査 調査のケーススタディ
3. 学会等名 東海大学x東京都市大学ジョイントシンポジウム
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 馬場一幸
2. 発表標題 今日の映像は何になるうとしているか
3. 学会等名 映文連 技術セミナー「最先端技術で広がるコンテンツ活用」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤到
2. 発表標題 映像ネットワークVIEWの時代
3. 学会等名 北海道道立近代美術館
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤到
2. 発表標題 パーソナルフォーカス「滅びゆくメディアのために」
3. 学会等名 イメージフォーラム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤到
2. 発表標題 サヴァイバル8「ヴィンテージ・ミル」
3. 学会等名 山形国際ドキュメンタリー映画祭
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田口かおり
2. 発表標題 『イメージの時空間 映像アーカイヴの多角的展開にむけて』
3. 学会等名 山形国際ドキュメンタリー映画祭関連シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田口かおり
2. 発表標題 「今、保存修復の使命とは」
3. 学会等名 アーツカウンシル東京 + 東京大学 + 東京藝術大学共同シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 北小路隆志
2. 発表標題 『イメージの時空間 映像アーカイヴの多角的展開にむけて』
3. 学会等名 山形国際ドキュメンタリー映画祭2017関連シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 北小路隆志
2. 発表標題 『イメージの時空間 映像アーカイヴの多角的展開にむけて2』
3. 学会等名 山形国際ドキュメンタリー映画祭2019関連シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤到
2. 発表標題 「新たな創造都市拠点設立に向けて」
3. 学会等名 山形国際ドキュメンタリー映画祭2019関連シンポジウム
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田口かおり	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青幻社	5. 総ページ数 198
3. 書名 『印象派、記憶への旅』（共著：岩崎余帆子、古谷可由他）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	屋代 敏博  (Yashiro Toshihiro)  (00453374)	東北芸術工科大学・デザイン工学部・准教授   (31501)	
研究分担者	阿部 宏慈  (Abe Kouji)  (10167934)	山形大学・人文社会科学部・教授   (11501)	
研究分担者	馬場 一幸  (Baba Kazuyuki)  (20621791)	目白大学・メディア学部・専任講師   (32414)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	根岸 吉太郎 (Negishi Kichiitarou) (20626147)	東北芸術工科大学・事務局・理事長  (31501)	
研究分担者	藤本 かおり(田口かおり) (Fujimoto Kaori) (60739986)	東海大学・創造科学技術研究機構・特任講師  (32644)	
研究分担者	石崎 武志 (Isizaki Takeshi) (80212877)	東北芸術工科大学・文化財保存修復研究センター・教授  (31501)	
研究分担者	北小路 隆志 (Kitakouji Takashi) (90649831)	京都造形芸術大学・芸術学部・教授  (34319)	
研究協力者	藤岡 朝子 (Fujioka Asako)	山形国際ドキュメンタリー映画祭・理事	
研究協力者	畑 あゆみ (Hata Ayumi)	山形国際ドキュメンタリー映画祭・事務局長	
研究協力者	石井 義人 (Ishii Yoshito)	シネマトグラファー京都・代表	
研究協力者	小川 直人 (Ogawa Naoto)	せんだいメディアテーク・企画・活動支援室・映像部門学芸員	